

# The Politics of Naming in Mainland China's Sexual Minority Activism

中国本土の性的マイノリティ運動におけるネーミングの政治学



于寧 (Yu Ning)<sup>1,2</sup>

1 Project Researcher, Komaba Campus Safer Space (KOSS), Division of International Cooperation, Komaba Organization for Educational Excellence (KOMEX), Graduate School of Arts and Science, University of Tokyo.

2 Research Fellow, Center for Gender Studies, International Christian University

特定の人々の集団を何と呼ぶかはきわめて政治的な選択であり、とりわけ性的マイノリティの場合、その呼称には歴史的・社会的な価値判断がついてまわる。本稿では中国本土における性的マイノリティの呼称の変遷をたどった。

## Abstract

When addressing the sexual minorities, word choice is an important issue. *Tongxinglian*, the Chinese translation of the English homosexual(ity), was borrowed from the Japanese translation (*dōseia*) around 1910s. As an official term to refer homosexual(ity), this term is used extensively, but the sexual minorities are reluctant to use it due to its association with the social stigma of mental illness and crime. *Tongzhi* (comrade), a term that had been the most common way to address a person to another since the Mao era, started to be used in Hong Kong and Taiwan in the late 1980s as a way to refer to sexual minorities. This utilization also subsequently gained popularity among sexual minorities in the Mainland by the middle of 1990s, despite never been approved by the authority. In addition, *Ku'er* (the transliteration of the English queer), which first translated in Taiwan, was introduced into Mainland China around the late 1990s, and has been widely used in the sexual minority-themed political and cultural activities ever since. These three terms have been used concurrently among sexual minority activists in mainland China. Each of these terms carries different nuances; and the speaker's choice of word can reveal his or her political agendas. The paper will revisit the history behind the initial importation of these concepts, then analyse how the acceptance of these concepts influences the understanding of the same-sex intimate relationship in China, and finally show how such understanding affects the sexual minorities' politics of naming.

## Keywords

ネーミングの政治学、性的マイノリティ運動、同性恋、同志、酷児

## はじめに

性的マイノリティを称するにあたり、どのような用語を選択するかは重大な問題である。「名前には殆どすべてのことが、もしくはそれ以上のものが含まれている」(Marinucci, 2020, 1650)。現代中国の性的マイノリティの運動においては、「同性恋<sup>1)</sup>」や「同志<sup>2)</sup>」そして「酷児<sup>3)</sup>」などのアイデンティティー・タームが併用されている。それぞれの言葉に含まれる意味は微妙に異なっており、どの言葉を選択するかによって、話者の背後にある政治性が異なってくる。本稿ではこのようなネーミングの政治学 (the politics of naming) に着目する。その中で「同性恋」は英

語の「homosexual(ity)」の中国語訳として生まれ、使われてきた歴史が最も長く、現在も広く使われている。しかし、医学や法学においては、「同性恋」は精神病や犯罪として定義された歴史が長かったため、この用語には社会的スティグマが強く付随しており、性的マイノリティの当事者は使用を避けようとする傾向も見られる。性的マイノリティの支援団体の名称に「同志」や「酷児」が多用される中<sup>4)</sup>、「同性恋」を使用した数少ない団体の一つである「同性恋親友会<sup>5)</sup>」は2020年に名称変更の意志を表明し、公募を経て<sup>6)</sup>、2021年4月から正式に団体名を「出色伙伴 (素晴らしい仲間たち)」に変更した。その理由の一つは、「同性恋」を

名称に使用すると、団体として政府関係部門に公式登録ができないためである。そこから、「同性恋」が政治的にセンシティブな言葉として当局に取り扱われていることが読み取れる。

当事者が使用をためらう「同性恋」ではあるが、一般に広く認知されている用語であるため、公の場で同性愛に言及する際は「同性恋」を使用しないと意味が通じないというジレンマが存在する。「同志」や「酷兒」は婉曲的に隠語として当事者に使われる側面があるが、それとは対照的に「同性恋」は同性愛者を明確に表しているため、映画祭の「中国同性恋电影节<sup>7)</sup>」など、「同性恋」という言葉を敢えて積極的に採用する戦略もとられていた。これらは当事者への不当な扱いに対して正面から反論する姿勢を示していた。このような取り組みは英語圏での「queer」にまつわる「汚名を再盗用する戦略」と類似している。

本稿は「同性恋」をはじめとする三つの用語をめぐる概念の歴史の変遷を描き出し、それらの導入によって、同性間の親密な関係に対する認識がいかなる変化を遂げたかを明らかにする。それが今の性的マイノリティのネーミングの政治学にどう影響しているのかに特化し、現在の性的マイノリティ運動における「同性恋」という言葉に含まれる政治的可能性を提示する。

## 1 中国における「同性恋」の翻訳と受容の歴史

中国における同性愛の概念の出現は民国時代<sup>8)</sup>に遡ることができる。「homosexual(ity)」という西洋性科学の概念を翻訳した際、日本の知識人たちが先に訳出していた「同性の恋」や「同性愛」、「同性恋愛」などの漢語訳を借用し、中国語訳として、「同性恋」や「同性愛」、「同性恋愛」などの用語を考案した<sup>9)</sup>。これらの用語がもたらした新しい概念が、中国で伝統的にあった同性間の親密な関係への理解と合わさることで、新しい解釈の枠組みが生まれるようになった。中国で行われた近代化を図る啓蒙運動に合わせ、同性間の親密な関係に関する新しい言説は主に「恋愛論」と「性欲論」という二つの文脈に分けて、女性の権利をめぐる問題や、教育問題、または性科学の医学知識など、それぞれ異なる分野において人々に受容された。その中で、「同性恋/愛」を女性固有の問題として論じるものもあれば、

男女問わず人間に見られる病理的な変態性欲として解説するものもあった。そのほか、当時の近代化を主張する知識人の中には、「男色」や「龍陽」、「鷄姦」、「癖」など中国固有の概念によって従来から表現されていた男性間の性的関係に「同性恋/愛」という新しい用語を結び付け、それを中国の「封建社会の遺物」として根絶すべきと訴えるものもいた。(許, 2015a, 26)。

中国にもたらされたこのような新しい同性愛言説は、民国時代に30年余りにわたって浸透するも、毛沢東時代に入ってから「性言説」に対する抑圧により、一時的に公に現れなくなったとされた (Evans, 1997, 26)。筆者の調査によると、1976年に「文化大革命」が終わるまで、書籍や雑誌、辞書において、民国時代の言説を継承する形で「同性恋/愛」という言葉は使用されていたが、同性間の親密な関係を表現する際は「鷄姦」という男性同士の性行為を表す用語が圧倒的に多くなり、(男性)同性間の性的行為を「資本主義の墮落」及び「反革命」に結び付け (陸, 2014, 52)、法的取り締まりの対象にもなった。

その後、中国が改革開放政策のもと世界と交流を再開した1980年代に、民国時代と同じように翻訳を通じて積極的に海外の知識が大量に中国に紹介され、民国時代に出版された書籍も大量に再出版され、その結果、実質的に民国時代の知識の継承が行われることとなった。その中で、「同性恋/愛」を扱った書籍も再出版され、民国時代の知識を引き継ぎながら、「同性恋/愛」言説が再び公共言説において議論されるようになった。1990年代には辞書に収録された同性愛を示す用語が「同性恋」として定着した。同時に、エイズの流行により、公衆衛生問題としての「同性恋」言説が多く生産されるようになった (李, 2014, 304-332)。1990年代初期に国家公安部は「同性愛活動は人間性を屈折させ、社会道徳に違反し、社会風習を損ない、家族の調和を破壊し、刑事犯罪を誘発し、社会治安を脅かし、性感染症やエイズの主要感染経路でもある」としていた<sup>10)</sup>。

## 2 ネーミングの政治学

前節は1910年代から1990年代にかけて、中国本土における「同性恋」という用語の翻訳プロセスと受容の歴史を振り返った。また、民国時代から毛沢東時代を経て改革

開放時代に至るまで、同性間の親密な関係に対する認識の変遷により、「同性恋」という用語には、変態心理や「封建社会の遺物」、資本主義道徳墮落の象徴、犯罪、エイズなど、様々な病理化・犯罪化・非道徳化などといったスティグマが積み重なってきた過程を解明した。

このように強くスティグマ化された「同性恋」に対して、その用語の使用には世代差や階級差が顕著であった。包 (Bao, 2018, 47-57) は上海の異なるクィアスペースで活動する当事者の自称に対して比較し、若い世代の当事者は「同性恋」を拒絶し、「同性恋」を自称に使用していたのはほぼ高齢者だったことが分かった。しかし、1990年代以降、「同性恋」のほか、「同志」と「酷児」などの言葉が中国本土に伝わり、三つの言葉が併用される中、中国本土のクィア運動において高齢者が主に使う「同性恋」という用語の政治性に対する再評価の動きも現れてきた。ここからは「同性恋」という用語にまつわるネーミングの政治学を試論する。

## 2-1 「同志」と自己肯定戦略

中国語で「同志」は同じ政治理念を持つ仲間を表す言葉である。1949年から1990年代まで、中国本土では一般市民の間の敬称として広く使われていたが、現在はほぼ共産党員の間でのみ使用されている。邁克 (2003, 244-247) は1970年代末からサンフランシスコで香港のレズビアン友人のことを「同志」と呼び始め、1980年代から香港の雑誌投稿の文章にも同性愛を意味する「同志」を使ったという。1989年、林奕華と邁克が主催した「香港同志電影節 (香港レズビアン&ゲイ映画祭)」の名称に「同志」が使用されたことをきっかけに、中国語圏において、同性愛、ひいては広義の意味で性的マイノリティを意味する用語として「同志」が広く使われるようになった。

「同志」が同性愛者の自称に使用されたことに対しては「90年代の現代中国語におけるもっとも独創的な盗用と発明」と評価するものもいた (朱, 2005, 9)。また、周華山 (1997, 365-368) は「同志」の使用を土着的な文化戦略として理解し、西洋中心主義に挑戦するものだと、その政治的可能性を見出そうとした。

1990年代半ばから、「同志」は中国本土の性的マイノリティの当事者にも自己肯定する自称として使われるように

なったが、この用法は中国本土では公式には認められず、『現代漢語詞典』の編集者は『同性愛者』はお互いに『同志』と呼び合い、その使い方は知っているが、(辞書に)収録することはない。彼らがそのような使うのは自由だが、規範性のある辞書としては収録しないことで、これを提唱しない・注目すらしたくないというスタンスを示したい」と述べ<sup>11)</sup>、「同志」の同性愛者を指す意味は今も収録されていない。

中国語では、「同性恋」より「同志」を採用するという当事者の自己肯定戦略は、英語圏における「homosexual」という病理的な命名より「gay」という自己肯定的なタームを選んで自称するのと類似している。英語圏で「gay」という単語は1960年代末から当事者に広く使われるようになったが、同性愛者を意味する用法は長い間世間で認められず、例えばNew York Timesでその使い方が認められたのは1987年以降だったという<sup>12)</sup>。名前は外向き (denotative) だけではなく、内向き (connotative) でもあり (Marinucci, 2020, 1647)、世間に指定された命名が自己認識と不一致の場合、当事者が主張する自称を否定することは、その自己認識を否定することにつながる。

## 2-2 「酷児」の導入

1992年、林奕華は台湾金馬国際映画祭の「新同志電影」部門を企画した際、当時の英語圏での「New Queer Cinema」を「新同志電影」と訳し、「同志」に訳された「queer」が初めて中国語圏に紹介された (許, 2015b, 27; 林松輝, 2006, 78)。英語圏において「queer」は本来は「正常ではない、気持ち悪い」という意味で、男性同性愛者に対する口語的な侮蔑語であるが、1980年代、エイズ危機の中、当事者団体は自らその言葉が持ち合わせるネガティブな意味を受け入れ、規範に反するすべてのセクシュアリティを指す包括的な用語として肯定的に使用し、新たな連帯を可能にしようとした。これは「汚名の再盗用 (reappropriation) 戦略」と言われている。1994年1月出版の雑誌『島嶼辺縁』で、洪凌、紀大偉と但唐謨 (1994, 64) は「queer」を「酷児」に音訳し、既存の「gay」などの概念と比較しながら、「酷児」という概念が持つ規範に対する挑発性を強調した。アメリカにおける現代クィア言説はエイズ運動に由来するのと異なり、台湾における「酷児」は映画や文学を含むクィア文化

そしてクィア理論に由来するため、「queer」にまつわる「汚名」の再盗用 (reappropriation) 戦略が「酷児」という訳語では表現できないと指摘された (林松輝, 2006, 79-80; 陳崇騏, 2000, 225)。また、中国語においては、「酷児」はもともと意味を持たない言葉だったが、「酷」は英語の「cool」の音訳で、「クール (格好いい)」という意味合いで使われており、「児」は名詞として「子供」の意味を持つほか、接尾辞として、物事を可愛らしく表す機能もあるため、汚名であるどころか、「cool kid」というクールで可愛い価値を保有していた。日本コカ・コーラ社の果汁入り清涼飲料水 Qoo (クー) が2001年から台湾で発売され、中国語名が同じ「酷児」に訳された。「酷児」に潜むエリート意識と年齢差別を指摘する者もいた (林松輝, 2006, 83-88)。

1998年6月に崔子恩が雑誌『希望』に企画した「認識同性愛 (同性愛を知る)」特集において「酷児理論」が用語として紹介されたほか (崔、李, 1998, 70)、雑誌の中には台湾で出版された紀大偉の著書『酷児啓示録』と『酷児狂飲節』の表紙の写真も掲載されており、台湾で訳出された「酷児」が中国本土にも登場した。その後、崔子恩 (1999, 59) の雑誌文章や李銀河 (2000) の翻訳集『酷児理論：西方90年代性思潮』などを通じて、「酷児」が学术界やクィア運動において認知されるようになった。一方、中国本土でも Qoo (クー) が発売され、「酷児」は一般的には飲料水の名称として広く認識された。

### 2.3 「同性愛」の政治性に対する再評価

2000年代から「同性愛」「同志」「酷児」の三つの言葉が併用される局面が形成されつつある中、「同性愛」の政治性に対する再評価が行われるようになった。

2000年12月、湖南衛星テレビの『有話好説』というトーク番組で、男性同性愛者で監督・研究者の崔子恩、社会学者の李銀河、レズビアンで芸術家の石頭の三人をスタジオに招待し、同性愛をめぐる収録現場の観客と議論を行った。これは「走近同性愛」という同性愛特集として放送され、同性愛者が初めて中国本土のテレビに取り上げられることとなった。「彼らが『同志』という言葉でお互いを呼び合うのは、(自分たちのセクシュアリティを) 隠したいからですか? 『同性愛』という言葉を使うと自分たちを卑下する

ように感じるからですか?」と観客が質問したのに対し、崔子恩は「『同性愛』も『同志』もプライドをもって使います。ただ『同志』のほうがよりプライドを強調した感じですよ。」と答え (崔, 2008)、「同性愛」という用語もポジティブに使用していると主張した。

また、2001年12月に、崔子恩が北京大学の学生団体「北大影協」と共に「中国同性愛電影節」を立ち上げた際、香港で既に約10年使用されていた「同志電影節」ではなく、敢えて映画祭の名称に「同性愛」を採用した。「同性愛」は慎重な扱いを要する「政治的なセンシティブな言葉」という認識があり、映画祭の開催許可を取る際には「同志」が使われたという。「同志」という言葉は性的マイノリティの当事者に使われるようになったが、その用法は当時まだ一般大衆には広く認知されておらず、検閲を避けるための隠語として機能していた。映画祭は2007年の第三回に名称を「北京酷児論壇」に変更した。この改名には、トランスジェンダーをテーマにした作品も上映するため、「同性愛」という名称は映画祭に相応しくなくなったという考えもあったが、政治的リスクを減らすために、「同志」よりも当局に注目されにくい「酷児」が選ばれたという (于, 2017, 31)。

ここからは、中国本土の特定の政治状況において、当局と対峙する際に、「同志」と「酷児」は脱政治化的 (apolitical) に用いられていることが分かる。周華山が「同志」に見出した政治的な可能性や、紀らが強調した「酷児」の規範に対する挑発性は、当局にはその本意が伝わらず、彼らが言葉に込めた政治性は意味を持たなかった。「同志」と「酷児」はただの「同性愛」の隠語、あるいは婉曲表現として、中国本土だけではなく、台湾でも機能する場合があるとも指摘され (林松輝, 2006, 85)、林賢修 (1997, 34) は、クィア理論の真髄を追求するならば、汚名である「同性愛」をポジティブに自称に使うべきと主張した。「同性愛」という用語はバイセクシュアルやアセクシュアル、トランスジェンダー、ノンバイナリーなどと自認する人の多様な経験と表現を表出することには限界があり、あらゆる性的マイノリティが包容される名称としては「同志」と「酷児」のほうがより適切である。一方、中国のクィア運動において、特に当局を意識する場合は、「同志」と「酷児」を採用することは、菅野優香 (2019, 118) の言葉を借りると「不可

視化の戦略」を取ってしまうことを意味する。このジレンマに直面する際に、敢えて「同性恋」を自称に使用することは政治的な意味を持つことになるであろう。

ここからは、中国のクィア運動において「同性恋」を政治的に使用する事例を紹介する。2008年に、北京クィア映画祭から生まれた「中国酷児巡展」では、関係者が「我門要看同性恋電影（我々は同性愛の映画が観たい）」というスローガンが書かれたTシャツを着用した。これは、当局が同性愛を扱う映画への検閲に対する異議申立てとして行われた行為だった。同年の3月に、国家広播電影電視総局が「広電総局關於重申電影審查標準的通知」を通達し、「同性恋」を淫乱、強姦、売買春、性行為、性変態などと並列に、猥褻・低俗なコンテンツと見なし、修正・削除すべき対象に該当するとした<sup>13)</sup>。当事者の間では、「同性恋電影」という用語より、「同志電影」や「酷児電影」のほうが広く使われているが、「中国酷児巡展」の運営者はスタッフのTシャツに「酷児」ではなく、敢えて「同性恋」と印刷し、正面から当局の検閲に抵抗する姿勢を示した。

また、文頭に取り上げた「同性恋親友会」は2008年の成立当初、二人の創立者が団体名に「同性恋」を使うことを強く主張した。それは、当局にも一般大衆にも公に認知されている用語は「同性恋」であり、「同志」や「酷児」などの隠語より、「同性恋」を堂々と使用することが同性愛者である自身を受け入れ、差別に向き合う第一歩という認識があったためである。「同性恋」を肯定的に使用することを通じて、同性愛をはじめとする性的マイノリティの汚名返上を図った。「同性恋」以外の名称であれば団体がNGOとして公式に承認されたが、創立者は改名することは性的マイノリティであることを隠す行為だとして、改名の選択肢を断ったという<sup>14)</sup>。ネーミングがその対象を存在させるように (Marinucci, 2020, 1647)、隠語を使うのではなく、公式用語を使うことでその対象が公に存在していることを強く主張している。

近年においても、当局などに対する権利主張の行動では、「同性恋」がしばしば使用されている。一つは、2018年4月13日に、中国のSNS新浪微博が発表した違法コンテンツを削除する「一掃キャンペーン」の削除リストに「同性恋」が入っていることに対して、ハッシュタグ「#我是同性

恋（私は同性愛者）」をつけた投稿で当事者らが抗議した。もう一つは、同年9月に同性愛者であることを知られたことで解雇された青島市の幼稚園教員が職場を訴え、「我教導孩子要誠實，所以我無法說謊。我是同性恋（子供に誠実であることを教える立場だから、嘘はつけない。私は同性愛者である）」と書いたプラカードを持った写真をSNSに投稿し、議論を呼んだ。

しかし、当局が同性愛をはじめとする性的マイノリティに対して検閲をかけるなど制限する方針により、「同性恋」という用語の使用には政治的リスクが常に伴う。その使用により、映画祭が取り締まられたり、団体のNGOへの公式登録が不可になったりするものが現状である。それゆえ、中国クィア運動におけるネーミングの政治学は非常に重要な課題である。

## おわりに

本論文はまず、民国時代から改革開放時代に至るまでの「同性恋」の翻訳・受容史を通じ、同性間の親密な関係に対する認識の変遷を追及し、「同性恋」という用語に変態心理や、「封建社会の遺物」、資本主義道徳墮落の象徴、犯罪、エイズなど、様々な病理化・犯罪化・非道徳化などといったスティグマが積み重なってきた過程を解明した。そして、自己肯定的・包容的な用語として「同志」や「酷児」などの新しい言葉が中国本土に導入され、それらの言葉と併用される中、「同性恋」が再評価されていく歴史を振り返った。中国本土の特定の政治状況においては、脱政治化・不可視化される「同志」と「酷児」に対して、「同性恋」には当事者による強い政治性が潜んでいることを確認した。汚名である「同性恋」を肯定的に使うことを通じて、同性愛をはじめとする性的マイノリティの汚名返上を図ることは、「queer」にまつわる「汚名の再盗用戦略」に共鳴するだけではなく、公式用語として敢えて「同性恋」を使用することで、公共領域に存在する権利を主張し、当局の不当な扱いに対して正面から反論する姿勢を表す効果が生まれることを明らかにした。それらを踏まえて、中国クィア運動におけるネーミングの政治学に対する更なる理解をこれからの課題にしたい。

注

- 1) 日本語では「同性愛」にあたる。専門用語であるため、中国語のまま表記する。
- 2) 「同志」とは中国語圏の社会において1980年代末から同性愛、ひいては広義の意味で性的マイノリティを意味する言葉として使用されている。
- 3) 英語の「queer」の音訳。日本語の「クィア」にあたる。
- 4) 実際の使用例として「同志亦凡人(Queer Comrades)」、「北京同志中心(Beijing LGBT Center)」、「中国酷児独立映像小組(China Queer Independent Films)」、「酷児大学(Queer University)」などが挙げられる。
- 5) 「同性恋親友会(Parents, Families and Friends of Lesbians and Gays China, PFLAG China)」は2008年に広州で設立され、性的マイノリティ本人だけではなく、その家族も含めサポートを提供する。中国各地に分会を広げ、中国本土の性的マイノリティの支援団体としては最大規模とされる。2019年2月27日にNHK BS1にて放送されたドキュメンタリー「ザ・カミングアウト ～中国・LGBTの叫び～」(監督：房満満)に登場した支援団体は「同性恋親友会」の上海分会である。ドキュメンタリー内では、「同性愛者親友会」と紹介された。
- 6) 「我們想征集新名字」同性恋親友会のWeChat公式アカウント「親友会PFLAG」にて2020年3月20日に投稿。
- 7) 北京クィア映画祭の前身である。2001年に創設。
- 8) 中国本土における1912年から1949年までの時代を指す。
- 9) 桑(2003, 102-103)は「同性愛」は日本からの外来語であると推定し、日本語の「同性愛」をもとに中国語の「同性恋愛」と「同性恋」という変化形が創出されたという結論を導いている。しかし、筆者の調べでは中国語の「同性愛」「同性恋愛」「同性恋」は三つとも日本からの借用で、中国で変化したものではない。
- 10) 公安部、公通字(1993)62号「公安部關於取締同性戀文化沙龍“男人的世界”的情況通報」
- 11) 「《現代漢語詞典》第6版發行引熱議 這本詞典有点“潮”」, 2012年7月16日, <https://news.ifeng.com/>

c/7fcgVAj55Hw

- 12) David W. Dunlap, How The Times Gave 'Gay' Its Own Voice (Again), The New York Times, June 19, 2017, <https://www.nytimes.com/2017/06/19/us/gay-pride-lgbtq-new-york-times.html>
- 13) 第三条第三項。
- 14) 「“出色伙伴”的公益路,堅持,讓我們更出色」出色伙伴のWeChat公式アカウント「出色伙伴」にて2021年5月8日に投稿。

参考文献

- Bao, Hongwei. (2018), *Queer Comrades: Gay Identity and Tongzhi Activism in Postsocialist China*, NIAS Press.
- Evans, Harriet. (1997). *Women and Sexuality in China: Female Sexuality and Gender since 1949*, The Continuum Publishing Company.
- Marinucci, Mimi. (2020). What's in a Name?. *Journal of Homosexuality*, 67(12), 1645-1652, DOI: 10.1080/00918369.2019.1610633
- Sang, Tze-lan D. (2003). *The Emerging Lesbian: Female Same-Sex Desire in Modern China*. The University of Chicago Press.
- 陳崇騏.(2000).「請問你是同性戀、酷兒還是同志?——論雜碎性愛身份政治」. 何春蕤編.『從酷兒空間到教育空間』麦田出版.
- 菅野優香.(2019).「コミュニティを再考する:クィア・LGBT映画祭と情動の社会空間」.菊地夏野,堀江有里,飯野由里子編.『クィア・スタディーズをひらく1:アイデンティティ,コミュニティ,スペース』晃洋書房.
- 洪凌,紀大偉,但唐謨.(1994).「小小酷兒百科」.『島嶼邊緣』10, 47-71.
- 許維賢.(2015a).「從艷史到性史:“癖”的語義流變兼論王韜的艷史」.『漢語言文學研究』3, 13-28.
- 許維賢.(2015b).『從艷史到性史:同志書寫與近現代中國的男性建構』中央大學出版社.
- 李銀河訳.(2000).『酷兒理論:西方90年代性思潮』時事出版社.
- 李銀河.(2014).『新中国性話語研究』上海社會科學院出版社.
- 陸新蕾.(2014).『從話語再現到身份抗爭:大眾媒介與中國同性戀社群的互動研究』博士論文:復旦大學.

- 林賢修.(1997).『看見同性戀』開心陽光出版有限公司.
- 林松輝.(2006).「翻譯酷兒：九〇年代以來台灣對酷兒話語的引介與實踐」.熊賢閔編.『性別與疆界』南洋理工大學中華語言文化中心, 73-94.
- 邁克.(2003).「同志」簡史」.邁克著.『互吹不如單打』牛津大學出版社, 244-247.
- 崔子恩.(1999).「酷兒狂歡節和打造欲望新地圖」.『計算機與生活』3,59.
- 崔子恩.(2008).『誌同志』.ドキュメンタリー (60分)
- 崔子恩, 李銀河.(1998).「四、同性戀小詞典」.『希望』6, 69 -70.
- 朱偉誠.(2005).「另類經典：台灣同志文學（小說）史論」.朱偉誠編.『台灣同志小說選』二魚文化事業有限公司, 9-35.
- 周華山.(1997).『後殖民同志』香港同志研究社.
- 于寧.(2017).「北京酷兒映畫展：現代中國における性的少数者の文化政治について」.『わたちの21世紀 特集 LGBT主流化の影で』90, 30-33.